

子規全集

第十卷

初期隨筆

講談社

N. D. C. 910 760p 20 cm

子規全集 第十卷

初期隨筆

定價 參阡八百圓

昭和五十年五月二十日 第一刷發行

著者 正岡子規

編集代表 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二―一二―一二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

郵便番號 一二二 振替 東京三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

©正岡忠三郎 一九七五年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

初期隨筆

⑭ 575	⑭ 529	⑭ 441	⑭ 360	⑩ 249	⑩ 219 下	⑩ 6
3	3	10	3	11	12	6
原 する か	罪 セシ カ	吸 と 孜 と	愛 惡 慾 ゝ	一 夜 一 年	462	第 末 加 勢
屬 する か	罪 セン カ 〔二例とも〕	汲 と 孜 と	愛 惡 慾	一 部 一 年	362	第 末 加 勢

目次

筆まか勢	第一編	五
筆任勢	第二編	二五
筆まかせ	第三編	三六
筆まかせ	第四編	五三
參考資料		六三
解題	和田茂樹	七元
解説	久保田正文	七四

編注

初期隨筆として收録した「筆まかせ」は子規の上京した明治十六年の翌年から書きはじめられた隨筆で、内容は子規みづから「筆まかせ」中の「隨筆の文章」に、「此隨筆なる者は余の備忘録といはんか、出鱈目の書きはなしといはんか、心に一寸感じたることを其まゝに書きつけたもの」「我思ふ儘を裸にて白粉もつけず、紅もつけず、衣裳もつけず舞臺へ出したるもの」といつてゐるやうに、自傳的な回想、身邊の見聞、世相批判、讀書の感想、言語・文學・文章についての省察、詩歌の批評など、青年子規の心裡に浮かんた萬般の事柄を思ふままに記録したもので、その時期は、明治二十五年に及んでゐる。

筆まかせ第一編 明治十七年——同二十二年

筆任勢 第二編 明治廿三年一月——同年三月中旬

筆まかせ第三のまき 明治廿三年三月十五日より

筆まかせ第四編 明治廿三年九月十五日より

全四冊からなる底本は全て國立國會圖書館藏本に據つた。

筆まか勢 第一編

白明治十七年
至同二十二年

編注 本卷では省いたが筆まか勢第一編の原本には
左の中扉がある。

〔中扉なし〕 明治十七年

筆満か勢 明治十八年

筆 任 せ 明治十九年

第末加勢 明治二十年

ふでまかせ 明治二十一年

筆満加世 明治二十二年

なほ、本書においては編者で注記したものはすべて
〔 〕でかこんだ。

筆任せ目録

明治十七年			夢中の詩	一丁	13
			趨り帳	一丁	13
			東京へ初旅	二丁	14
			仙人的思想	三丁	15
明治十八年			杯水	四丁	16
			譬喩活喩	四丁	16
			花と蝶	四	16
			文明の極度	四	17
			身心	四	17
			空間	五	17
			妖恠談	五	17
			暗黒	五	18
			豆と山	五	18
			空氣を抽象して	五	18
			東海	六	18
			東都四時	六	19
			夢	六	19
			夢の國	七	19
			英雄と馬鹿	七	20
			習字	八	20
			横着	八	20
			苦勞	八	21

一天	……	八
夢卜	……	八
枝上地上	……	八
時辰儀	……	八
求心力	……	八
眠起	……	九
主客	……	九
學問の深淺	……	九
夢醒	……	九
瓢箪	……	九
太閤	……	十
日本語	……	十
諂諛	……	十
鼻と財	……	十
舉一隅反之	……	十
比較	……	十
十年の宰相	……	十一

……	25
……	24
……	24
……	24
……	24
……	23
……	23
……	23
……	23
……	22
……	22
……	22
……	22
……	21
……	21
……	21
……	21

彌次喜多	……	十二	……	26
八犬傳	……	十七	……	29
明治十九年				
右手左手	……	十八	……	30
己レノ顔	……	十八	……	30
過不及	……	十八	……	30
寄席	……	十八	……	31
車を無難に轉覆せしむる法	十九	……	……	31
明治二十年				
關係	……	二十	……	33
言語の一致	……	廿一	……	34
百足の歩行法	……	廿一	……	34
大小	……	廿二	……	35
詩歌舞蹈	……	廿二	……	35
婚姻	……	廿二	……	35

愉快	……	廿四	……	36
地震に火の用心	……	廿六	……	38

明治廿一年

哲學の發足	……	廿七	……	39
世界と日本、日本と四國	……	卅一	……	42
葬	……	卅二	……	43
可恐者	……	卅二	……	43
言語と人氣、氣候	……	卅二	……	43
愛身、愛郷	……	卅三	……	44
夢不絶	……	卅四	……	45
演説の効能	……	卅四	……	45
放歌	……	卅四	……	45
半生の喜悲	……	卅五	……	46
Over-fence	……	卅六	……	46
Base Ball	……	卅七	……	48
退化	……	卅九	……	49

明治二十二年

漢字の構造	……	卅九	……	50
偶然	……	四十一	……	51
某と將某	……	四十二	……	52
和英小説家	……	四十三	……	52
鎌倉行	……	四十三	……	53
點數表	……	四十五	……	54
芝居役割	……	四十七	……	57
圖引八卦	……	四十八	……	58
八大傳第二	……	四十九	……	60
法醫工文理の順序	……	五十五	……	65
流行歌	……	五十八	……	67
忠臣藏役割	……	六十二	……	71
八大傳第三	……	六十三	……	72
謙遜	……	六十五	……	74
書目十種	……	六十五	……	74

見聞以外	……	六十六	……	75
下宿がへ	……	六十七	……	76
羅丁語と日本語	……	六十七	……	77
歴史の教授法	……	六十八	……	77
自著	……	六十九	……	78
批圈	……	七十	……	79
漢字ノ利害	……	七十一	……	79
日本語ノ利害	……	七十三	……	81
基論	……	七十四	……	82
人相學	……	七十六	……	83
小説の嗜好	……	七十七	……	84
春廼舍氏	……	七十九	……	85
妹と背鏡	……	八十	……	86
隨筆の文章	……	八十一	……	87
ゾラと春水	……	八十二	……	88
俳句と俳諧	……	八十二	……	88
歸郷中目撃事件	……	八十三	……	89

圓朝の話	……	八十五	……	91
同音拜借	……	八十六	……	92
出合の津を渡りて	……	八十七	……	92
繁華	……	八十八	……	93
名實	……	八十八	……	93
機械的人間	……	八十八	……	94
古池の吟	……	八十九	……	95
詩歌發句	……	九十一	……	96
二幅對	……	九十一	……	97
自炊千代萩	……	九十二	……	97
車夫のすゝめぬ方	……	九十五	……	100
落語連相撲 スミウチ(原)	……	九十六	……	100
話しずき	……	百六	……	109
愛友	……	百六	……	109
當惜分陰	……	百九	……	111
交際	……	百十一	……	113
隨筆	……	百十三	……	114

比較の方法	百十三	115
是空子	百十四	115
人物評論	百十五	116
バタを喰ふ法	百十六	117
忍びの術	百十六	117
生徒の尊稱	百十六	117
我身、、、、ハテ我身	百十七	118
木屑録	百十七	119
修飾	百十九	120
朝大盡夕書生	百二十	121
日本の人代名詞	百廿一	122
十二圓の外套	百廿四	126
少尊老卑	百廿六	127
書生臭氣、三區ノ比較	百廿七	128
日本の小説	百廿九	130
尻馬	百三十二	132
文章の繁簡	百三十三	132

一學科の區域	百三十四	133
歸化外國語	百三十六	135
地方の風俗人情	百四十二	140
應舉の失敗	百四十五	142
言文一致の利害	百四十六	143
博言學	百四十九	146
試験の點數	百五十	146
玄祖父	百五十二	148
曾祖父	百五十二	148
父	百五十三	149
余	百五十五	151
美人の出生地	百五十六	152
童謠	百五十七	152
一九の迷惑	百五十九	155
道德の標準	百六十	155
役不足	百六十二	157
多病才子	百六十二	157

落語家遺漏	百六十三	158
枕上の山水	百六十四	159
比較譬喩的詩歌	百六十五	160
きたないことを奇麗にいふ方	百七十三	169
昔まつこ	百七十四	170
ぢぐち	百七十五	170
常盤の藝くらべ	百七十七	172
方言	百七十八	173
方言第二	百八十	175
行軍	百八十	176
言文一致第二	百八十二	177
のぼせぬ法	百八十三	178
扶桑名媛	百八十三	178
慎字	百八十六	181
大三十日の借金始末	百八十九	186
タチツテト	百九十二	188

歌舞伎座	百九十四	189
道中の佳景	百九十七	191
病氣見舞	百九十八	192
松山會	百九十九	193
へそたゝき	二百四	199
三光日月星	二百四	199
對句	二百五	200
室名	二百六	201
夢中の場所	二百七	202
十二月歸省	二百七	202
五友の離散	二百九	203
七變人の離散	二百十	204
遺傳	二百十	204
クワとカ	二百十五	210
高鼻の利害	二百十八	213
三ツ子の魂、百まで	二百十八	213

筆まかせ〔編注 中扉なし〕

明治十七年

四國 沐猴冠者 著

○夢中ノ詩〔目錄ニ夢中の詩〕

二月十三日風邪劇シク聲全ク出デズ 夜半夢驚クノ際雪ノ窓ヲ打ツヲ聞ク 夢カ幻カ一聯ヲ得タリ
打窓聲小軟於雨、 鋪地色明白似霜、
翌曉眠覺メテ後猶模糊こも心胸ニアリ

○趨り帳

余觀山翁の處へ孟子の素讀を教へられに行きし時なれば八九歳の時なるべし 余は兎角前を忘れる
こと甚しかりしと見え 翁は余に向ひ忘れぬ爲に知らぬ字を帳面につけておけといはれしかば 余

は家に歸ると判紙にて帳面をこしらへ 其上に何とかかゝんと思ひしが字を知らず ふと思ひ出したるは四五日前素讀せし處に趨の字ありて「ワシリ」と讀みしかば「ワスレ」といふ字ならんと誤解し本を見て趨の字を尋ねあたりしかば 帳面の表に「趨帳」の二字を書し翌日平氣にて翁に示せしに 翁は失笑してこは忘るといふ字にあらず 走るといふ字なりと諭し給ひ 之を消して傍に朱をもて備忘錄の三字を書き給ひしかば 此後は帳面の上に之を手本にして備忘錄と書きゐたり

○東京へ初旅

去年六月十四日余ははじめて東京新橋停車場につきぬ 人力にて日本橋區濱町久松邸まで行くに銀座の裏を通りしかば 東京はこんなにきたなき處かと思へり やしきにつきて後川向への梅室といふ旅宿に至り柳原はゐるやと問へば 本郷弓町一丁目一番地鈴木方へおこしになりしといふ 余は本郷はどこやら知らねど いゝ加減にいて見んと眞真に行かんとすれば 宿の女笑ひながらそちらにあらずといふにより 其教えくれし方へ一文字に進みたり 時にまだ朝の九時前なりき それより川にそふて行けば小傳馬町通りに出づ、こゝに鐵道馬車の鐵軌しきありけるに余は何とも分らずこれをまたいでもよき者やらどうやら分らねば躊躇しゐる内 傍を見ればある人の横ぎりなければこはくと之を横ぎりたり 其後ほどこ通りしか覺えねど大方和泉橋を渡り（眼鏡かも知れず）湯嶋近邊をぶらつき 巡查に道を問ふすべをしらねば店にて道を問ひながらやう／＼弓町まで來り一番地といふて尋ねしに提灯屋ありければ こゝに鈴木といふて尋ねしに 此裏へまわれ 小き家